令和元年度（平成 31 年度）

文部科学省指定

「次世代の学習ニーズを踏まえた指導充実に関する研究」報告書

岡山県美作高等学校

目　次

１．　はじめに　　調査研究の目的、内容について

２．　実践内容

地域人材の活用　鏡野町シニアスクールとの合同学習会
郷土料理講習会
探求学習
先進校視察について　　鳥取県立鳥取緑風高等学校
島根県立浜田高等学校
大分県大分教育委員会
その他の活動

３．　成果

４．　課題　　次年度に向けた取り組み

１．はじめに

調査研究課題名

過疎地と共生する通信制生徒の学習支援事業

～人口減少が続く地域における地域が学校　地域人が先生

そして産・官・学協定事業で地域のこどもを地域が育てる～

調査研究のねらい

過疎化・人口流出が続く地域においては、依然として不登校をはじめとする特別な支援を必要とする生徒が減少していない実情がある。将来、本当の意味でも地域を支える人材は、このような生徒である考える。そして、教科書からだけの知識を身につけた生徒だけでなく、人とのふれあいから学ぶ知識の両方を身につけた生徒の育成を目指す。　「地域が学校　地域人が先生」という観点から、今まで日本社会を支えてきた地元の高齢者を指導者に加えた教育活動を実践していき、そして継続的な調査研究が行えるよう、大学教授や行政関係者と連携した活動とする。今回、次世代の学習ニーズを踏まえた指導における「特別な支援を必要とする生徒」を不登校やひきこもり、発達障害など特別支援教育に該当する生徒と位置づけ調査研究を進めていく。

調査の概要

(1) ひきこもり、無職・無就学生徒の解消に向けた教育の実践　　定員 10 名とした、ひきこもりや無職・無就学生徒のための学習教室（名称　ネスト）を開校し、学習及び社会支援活動を行う。その際、地域人材を活用し、地域人が教師役となり、学習支援や庭木の剪定作業、郷土料理の調理などを教授する。(2) 不登校、引きこもり等の生徒及び家族のための本作成　　不登校で苦しむ家族や生徒本人が抜け出すきっかけとする活動を目指す。(3) 高卒資格を持つ人への再教育の場　　概ね 30 歳までの若者に対する再教育を実践する。自己肯定感の回復、再度学びに向かう意欲の醸成を目指す活動となる。学習内容は、国語、社会などの 5 教科の学び直し事業だけでなく、就労活動支援としてハローワーク等

との連携を行い、就労活動や経営者になる講話などを取り入れる。また、新聞記者によるＮＩＥ活動、(1) と同様に、地域人による講義などを実施する。(4) 閉校した学校の活用校内で就業体験ができることを最大限のメリットと考え、農産加工会社での就業体験（インターンシップ）を実施する。(5) 教員不足解消　自学自習というスタイルを用いて、教室に教師がいない場面でも学習することができる活動を実践する。生徒は、タブレットを用いて、株式会社クラッシーの学習動画やＮＨＫ高校講座の視聴を行う。その際、質問などはメールやLINEを用いる。教師は、学校にいながら生徒への対応が可能となる。

調査研究メンバー

担当者氏名	所属研究機関 部局・職名	具体的な役割分担
山下　武宏	通信制課程　教頭	責任者
友光　美帆	教諭	不登校生徒本作成担当
村山　直人	教諭	教員不足の解消担当
小林　　泉	講師	学習教室（ネスト）担当
太田　知里	教諭	再教育の場担当
岡野　楓基	講師	閉校した学校の活用
木村　みどり	非常勤講師	再教育の場担当
竹内　正人	事務室長	事務責任者　経理担当
仲田　智子	福祉コース長	不登校生徒本作成担当
川﨑　雅史	地域相談員	再教育の場担当

２．　実践内容

１．本校次世代学習ニーズに関する研究

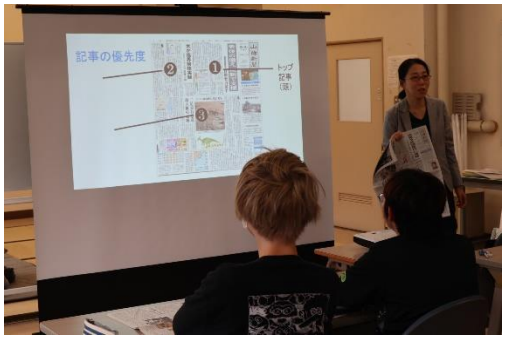
(1)　地域人材の活用　【合同学習会】

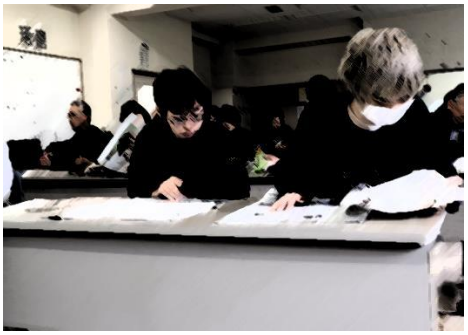
10 月 28 日に旧奥津中学校（奥津キャンパス）において、通信制課程生徒と鏡野町シニアスクールとの合同学習会を実施した。鏡野町シニアスクールとは、鏡野中学校の空き教室を使用して、地域の高齢者が集まり学習を進めている教室である。歴史や文化、美術などの講座があり、今年度は９名が在籍している。昼食時間には、中学生と同じ場所で給食を食べ、放課後には美化委員と花壇の手入れを行うなどの交流があるが、義務教育や高校受験などの理由で、合同での学習を行うことはない。

そのような背景を踏まえ、通信制生徒とシニアスクール生徒が共同で学習することでのメリットがあると考え、合同学習会を実施した。

当日は、２つの学習（新聞記者によるＮＩＥ授業、ｉＰａｄを使用しての学習）を行った。まず新聞を活用したＮＩＥ授業では、**山陽新聞社　矢根美紀子記者**を講師に迎え、新聞の読み方に関する講義を全員で受けた。普段から新聞に触れる機会の多いシニアは記者の説明にも熱心に耳を傾け、時折メモを取る姿が見えた。通信制生徒は、新聞に触れる機会も少なく、自宅に新聞を取っていない生徒がほとんどであったため、新聞を広げることからスタートした。美作高校に関する新聞記事を使用した講義であったため、とても興味深く、そしてどちらの生徒にとっても有意義な時間となった。

２つの講座は、iPad を用いての学習であった。本校教員の村山直人教諭による講義のあと、通信制生徒がシニア生に iPad の使用方法などを伝授した。シニア生は、通信制生徒の状況を素早く察知し、おとなしい生徒には、いろいろ質問をぶつけ会話を広げ、技を持っている生徒には、どんどん使用方法を聞くなど、これも充実した時間を過ごした。シニアスクールをはじめとする地域人は、その生徒が抱えている不安や悩みをしっかりと受け止めることができ、生徒が安心して言葉を発することができる雰囲気づくりに貢献した。「昔取った杵柄」ではないが、若い頃から取り組んできた趣味や特技の話を披露することにより、生徒との心の距離が縮まった。





(2)　地域人材の活用　【郷土料理伝授】

今回の研究の一つとして、地域人材が持つ技を通信制生徒に伝授するがある。そのような体験場面があったのは、２月に行われた「調理実習～郷土料理講習会～」であった。シニアスクール生が事前に計画を進め、巻き寿司作りと吸い物、そして串揚げといった料理を作ることとなった。

通信制生徒も料理は多少経験をしているが、巻き寿司は初体験の生徒多く試行錯誤しながら巻いていた。

一人のシニア生が見本をみせ、今度は生徒が巻き寿司を巻くとしていたが、丁寧な指導、そして上手くいかなくても決して責めることをしない指導もあり、生徒は１度目より、２度目、３度目と上手に調理するようになった。また、串揚げの場面では、男性のシニア生から油の入れ方から、揚げかたなどを伝授され、通信制生徒も上手に串揚げを完成させた。

このように、**「教えて、見せて、そしてほめる」**方法は、われわれ教師にも参考となる指導方法であった。

食事中には、地域の話や昔の行事などで話は盛り上がり、参加した通信制生徒は、「シニア生が上手にサポートしてもらえたので助かった。」や「また今度も、合同学習会を実施したい。」などの感想を述べた。

通信制生徒にとって、同年代の若者には気を使うなど、緊張する場面が多いが、年の離れたシニア生だと、自分を上手に出せるように感じた。今後も、定期的な交流が必要だと感じた。

（３）探究学習　【町巡り授業】

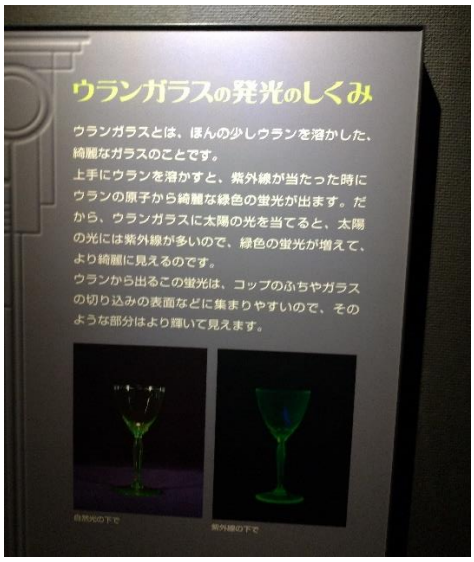
閉校した学校の活用は、人の目が気になる通信制生徒にとっては、とてもよい環境である。そして、生徒の中から、普段利用している学校周辺に関する調査研究を実施したいと声が上がり、12 月に**「鏡野町めぐりの学習」**を実施した。

鏡野町は、約 10 年前にいわゆる「平成の大合併」によって、旧上斎原村、奥津町、鏡野町そして富村が合併をし、現在の鏡野町となった。当日は、地域のことを一番よく知っているケーブルテレビ局を訪問し、それぞれの地域の名所等を学んでからのスタートなった。人口約１万人の小さな町であるが、郷土歴史資料館やオルゴール館など、名所も多く、生徒にとっては視野を広げる活動となった。

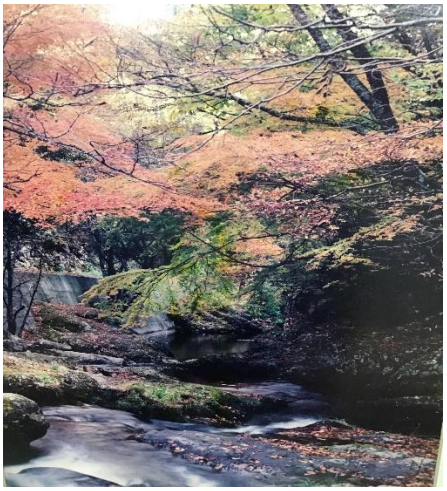
その後、地域を散策しただけでなく、地域人から聞いた内容や情報をパワーポイントにまとめ発表する準備を行い、２月に行う本校の「入学説明会」での生徒発表の部に備えた準備を行った。【当日は、コロナウイルスの関係もあり、生徒発表は中止】

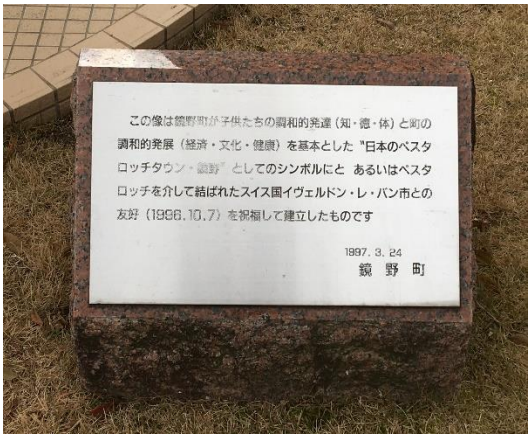
パワーポイントを作成する際には、教師のアドバイスを受けながら、写真の使用方法やコメントの作成など、生徒同士で会話するなど作成を行った。

発表の機会は残念ながらなくなったが、今後何かの機会に発表する計画を立てたいと考える。


ウランガラスの発光のしくみ
ウランガラスとは、ほんの少しウランを溶かした、綺麗なガラスのことです。
上手にウランを溶かすと、紫外線が当たった時にウランの原子から綺麗な緑色の蛍光が出ます。だから、ウランガラスに太陽の光を当てると、太陽の光には紫外線が多いので、緑色の蛍光が増えて、より綺麗に見えるのです。
ウランから出るこの蛍光は、コップのふちやガラスの切り込みの表面などに集まりやすいので、そのような部分はより輝いて見えます。
自然光の下で
紫外線の下で

道の駅
奥津温泉
昼食バイキング 温泉亭
旬彩市場・青空市場
営業時間
AM 9:00～PM 5:00
おばちゃんの味
田舎料理
バイキング




この像は鏡野町が子供たちの調和的発達（知・徳・体）と町の調和的発展（経済・文化・健康）を基本とした"日本のペスタロッチタウン・鏡野"としてのシンボルにと あるいはペスタロッチを介して結ばれたスイス国イヴェルドン・レ・バン市との友好（1996.10.7）を祝福して建立したものです
1997. 3. 24
鏡 野 町

２．外部取り組みに関する視察報告

（１） 鳥取緑風食堂

本研究の中で、本校の取り組みを紹介するだけでなく、先進的に取り組む学校も参考となった。ここからは、視察報告を紹介する。

先ず、本校の課題でもある、保護者の応援が低調なことが課題解消に向けた取り組みにおける先進校の視察を行った。

鳥取市にある鳥取県立鳥取緑風高等学校における、保護者による**「緑風応援食堂」**の実施である。鳥取緑風高校は、定時制と通信制の独立校である。平成 17 年に開校し、現在　　名の生徒数を抱えている。人口の様子や学校が置かれている状況なども、本校と似ていることもあり、視察訪問をお願いした。

数年前から、定時制の保護者を中心に、「我が子や生徒のために何かできないか。」で始まった活動で、やはり「食育」の観点から、お腹いっぱいだと生徒指導面において、安定した学校生活を送れるというデータのもと、保護者会を中心に活動が始まった。今年度も２回活動が行われ、私が伺った日は、牛丼と豚汁の日であった。平日にも関わらず、お母さんだけでなく、お父さんの姿も多く見られ、活動への意欲を感じた会であった。また、教職員も生徒と一緒のテーブルで食事を取り、一人で食事をしている生徒にも声をかける場面も見えるなど、保護者及び教職員との連携がしっかり取れている学校であると感じた。「我が子だけでなく、他人の子どもにも満足させる」活動であった。

（２） 島根県立浜田高等学校（浜田高等学校定時制通信制支援協議会）

定時制や通信制生徒を支援するために、地方自治体が協力するケースがある。それが、島根県浜田市にある、島根県立浜田高等学校における、**浜田高等学校定時制通信制支援協議会**

である。これは、島根県西部に位置する自治体が、浜田高校の定時制通信制生徒に対して、

支援を行う活動である。目的としては、「支援協議会は教育の機会均等のもと、定時制・通信制教育の確立と振興を図ることにより、生徒の学び直しから者会に貢献できるまでの育成を支援するとともに島根県西部の持続的発展に貢献することを目的とする。」とある。
具体的には、学習支援事業（各種検定の補助）やキャリア教育事業（接遇研修やインターンシップに関する支援)、厚生事業などがあり、地域の生徒を支援する内容となっている。人口減少が続くという自治体の危機感があるが、「地域の子どもを地域で育て、そして地域で暮らす」というスローガンは、本校がある津山市も同様である。浜田高校の支援協議会と同じものは、私学である本校には難しいと考えるが、津山市商工会議所や若者定住の町作り等との連携を図った活動を実施したいと考える。

（３） 大分市教育委員会（遠隔教育フォーラム in 大分))

令和２年１月 27 日大分県教育委員会主催により「遠隔教育フォーラム in 大分」が大分県教育センターにて開催された。これは「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」において遠隔システムを活用した授業の成果と課題等について発表されるものであり、遠隔教育に関心をもつ本校で導入の参考になればと思い参加した。

実践発表では三重総合高校と久住高原農業高校の授業ライブを参観することができた。配信側の教員が受信側の生徒を指名し回答させたり、その回答を受けて新たな指示を行う双方向授業は、本校と奥津キャンパスをイメージできた。引率教員が 1 名であっても、担当教員が本校に居ながらにして遠隔による授業を行うことが可能になり、複数の教科の授業を行うことができると感じた。

実際の研究の中で、経費面の問題、機器・ソフトに関するスキルの必要性、配信側教員の見せるための授業の工夫、配信側や受信側双方の配慮など、体験してこそ分かる多くの課題も抽出されていた。それでもその課題に教員と生徒が協力して解決しており、遠隔教育の成果を感じた。美作高校でも将来的に導入を検討したい。

３．　通常活動

奥津学習会実績報告【前期】

日　付	活　動　内　容	参加生徒数・科目名
５月１４日	レポート作成	２名 津山市教育委員会視察
５月２１日	レポート作成 校外散策	２名 体育
５月２８日	レポート作成 iPad 講習	２名 社会と情報
６月４日	レポート作成	３名

	履歴書作成	職業実践
6 月 11 日	レポート作成	４名
6 月 18 日	レポート作成 ウォーキング	４名 体育
6 月 25 日	レポート作成 校外散策（自然科学）	４名 生物基礎
7 月 2 日	レポート作成 老人ホーム訪問	２名 ボランティア実践
7 月 9 日	レポート作成 奥津渓谷見学	５名 生物基礎
小計		９日間　　２８人

奥津学習会実績報告【後期】

日　付	活　動　内　容	参加生徒数・科目名
９月１７日	農作業	３名　ボランティア実践
９月２４日	校外ウォーキング 履歴書作成	４名　体育 職業実践
１０月１日	老人ホーム訪問	４名　ボランティア実践
１０月８日	iPad 講習	３名　社会と情報
１０月２２日	レポート作成	３名
１０月２９日	シニアスクールとの交流会	５名 総合的な探求、社会と情報
１１月５日	レポート作成 奥津渓谷見学	２名 生物
11 月 19 日	レポート作成	３名
12 月 17 日	鏡野町町めぐり	６名 社会と情報、総合的な探求
2 月 5 日	清掃ボランティア	４名
2 月 18 日	合同調理実習	４名 家庭総合
１０月２７日	全体交流会	５５名 総合的な探求
小計		１２日　９２名

火曜日を奥津キャンパス学習日と定め、校外での学習会を実施した。大勢が苦手な生徒も、少人数での学習には、積極的に参加できるなど、一定の成果は出ていると感じている。

恒例の夏学習会について

地域の方から学ぶというスローガンのもと始まった「次世代学習ニーズの研究」、今年度も地域の方を招いて学習会を実施した。それに加えて今年度は、高等学校を卒業した社会人も参加があり、幅広い年齢層での学習会となった。

当日は、本校教員による教科に関わる講義だけでなく、鏡野町社会福祉協議会職員による「認知症サポーター養成講座」の一部を体験した。福祉の分野に触れる機会の少ない通信制高校生にとって、とても刺激を受けた体験であった。

また、高校生が教師役となり、パソコンや iPad を用いて、地元の高齢者に「残暑見舞いハガキ作成」の指導を行った。作成時には、使用方法に関する会話だけでなく、今までの経験談や今熱中していることなどの会話を行いながら指導を続けていた。

この活動を通して、高校生が持つ技や技術を発揮するだけでなく、自分を表現する体験となったようで、生徒が一回り大きく成長する活動となった。

成果

今年度の成果として考えるのは、２点ある。

１点目は、一人の生徒に着目した実践である。この生徒は、中学時代は不登校傾向であり、毎日通学をしなくてよい本校の通信制課程に入学した。勉強はよくできる方で、特に数学は進研模試でも偏差値の高い数字を出す生徒である。家からスクーリングを行う奥津キャンパスまで近いという理由で火曜日に行う学習会に誘ってみた。はじめは用事などの理由で参加しなかったが、何度か声をかけ続けて参加するようになった。火曜日の学習会は、はじめは各自のレポートを持参して学習を行うこととしていたが、次第に生徒同士も話をはじめ、今では、はじめの１時間程度は個人の学習、残りの時間時間は、お互いの学び会の場所になっている。彼は数学が得意という話をしたが、数学が苦手な生徒に教える場面があった。ホワイトボードに数式を書きながら説明を行う。後輩も真剣にその板書を見て説明を聞くという場面であった。この日をきっかけにして、生徒同士のふれあいだけでなく、学び合いの学習となった。このことは成果として述べておきたい。

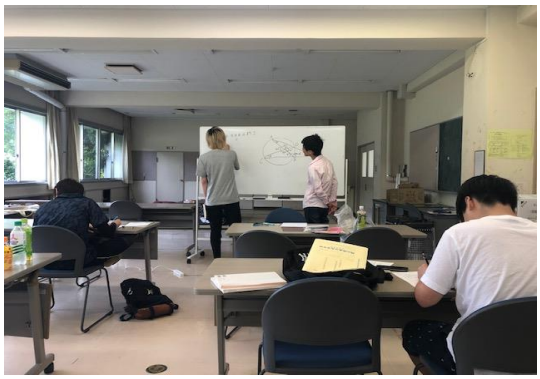
しかし成果はそれだけではない。その生徒は、本校がある津山市より「学び直し事業」のサポーターに選ばれ、年齢の高い方に数学を教えることとなった。それも、大学の授業で行うように数学である。ボランティアの様子を見学する場面があったが。マンツーマンで授業を行っていた。それは、若い教員よりも落ち着いて、丁寧に教えていた。彼は、30時間程度のボランティアを行ったということで、本校の教育課程表にある「ボランティア実践」という科目を修得することができたが、それ以上に**自分に対する自信が持てたのではないか**と考える。われわれにとっても、今年度の成果の一番に値する活動であったと考える。

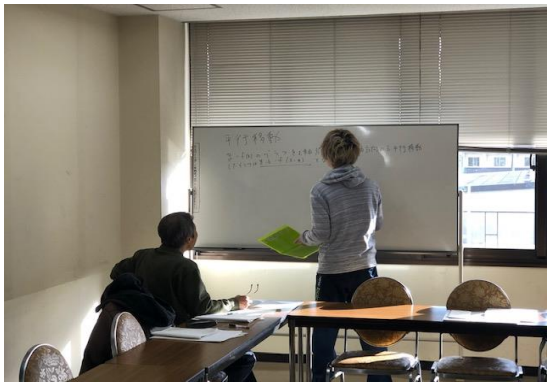
もう一点は、秋に行われた中国地区高等学校通信制教育研究協議会で、本校が発表校となった場面である。内容は、各学校の取り組みを紹介するのだが、今回は、「次世代の学習ニーズを踏まえた指導充実に関する研究中間報告」というテーマで私山下が発表した。今までの実践の様子や今後の単位認定までの計画等を発表した。各校の校長、教頭先生よりご指導やご助言をいただいたことは、今後の活動を実践していくうえで、とても参考となった。また、それだけでなく、広島県教育委員会教育指導監の方より、指導助言者講評の

中で、私の発表に対し、平成 30 年 3 月に告示の高等学校指導要領に書かれている「学校がその目的を達成するため、学校や地域の実態等応じ、教育活動の実施に必要な人的又は物的な体制を家庭や地域の人々の協力を得ながら整えるなど、家庭や地域社会の連携を深めること。また、高齢者や異年齢の子どもなど、地域における世代を越えた交流の機会を設けること。」を用いて、本校の活動から期待される高齢者に対する感謝と尊敬の気持ちや思いやりの心を育むことへの期待できる活動であるという助言をいただいた。

このことにより、本校の目指す活動が、学習指導要領にそった考えから発した活動であると再認識しただけでなく、時代が変化したとしても、先輩から学ぶ姿勢を忘れないという教育は継続すべきであると考えた。

以上 2 点において、今年度の活動の成果だと考える。





4．　課題

本年度の活動や成果の中でも触れたが、今回の活動において、やはり通信制の生徒だけでなく、地域人活用に際し、**本校の保護者の協力が必要だと再認識した**。鳥取県立鳥取緑風高等学校の実践でも感じたように、生徒を取り巻く多くの大人が、いろいろな角度から生徒に指導、助言そして励ますことによって、生徒は安心して学習を進めていけると考える。そのため、生徒にとっての一番身近な大人＝保護者や家族と学ぶ機会を作りたいと考える。そして、その身近な大人から学ぶことで、次世代への襷を後世に渡す若者に成長して欲しいと考える。

次に、調査研究終了後を見通した活動にするということである。この研究は最大 3 年間となり、本校研究も次年度で終了してしまう。補助金がなくなったからや研究指定が終了したからという理由で、活動も終わりでなく、**あらたな応援団作り**が課題であると考える。そのためには、島根県立浜田高等学校のように、地域の応援団作りに邁進する次年度にしていきたい。具体的には、地域経済を支える、津山市や近隣の商工会議所等に、「地域人財」の観点から、補助金だけでなく、インターシップ活動や就労支援の援助をお願いしたいとの旨を情報発信していくことに力を注ぎたい。

最後に、「教師不足解消」に向けた活動の中で、先生は学校に居ながら、生徒は別キャン

パスにて学習できる環境整備が必要であると考える。そのため次年度は、ICT 教育に詳しい教頭先生にバトンタッチすることになった。私はアナログ人間であるが、新教頭は、現在通常の全日制の授業を奥津キャンパスで同時に視聴できるシステム開発を進めている。まさに、ハイテクとアナログの共生が、次年度の本校の活動となる。大分市教育委員会が実践した「遠隔地教育」に向けた準備を進めていきたい。

このように、前年度の視察は、本校の弱点を改善するために視察等を行った。先進校からもらったヒントを本校の実践に活かすために行った活動であった。ここに上げた 3 つ課題を克服することができることが、全国でも本当の意味でのモデル校となれるように、活動を継続していきたい。

以上

報告書作成者
岡山県美作高等学校通信制課程
教頭　山下　武宏